

親 という も の

中居 みよ（教員養成課程教育臨床専攻）

この物語は、不器用で、熱くて、照れ屋で、荒っぽくて、それでいてどこか憎めない、一人の父親の姿を描いた作品である。

主人公は、そんな父親、ヤスさんである。ヤスさんは、ずっと家族というものを知らなかった。ヤスさんの母親がヤスさんを生んですぐに体調を崩して亡くなり、その後ヤスさんは親戚の家に養子に出された。その後 25 歳で一目ぼれした美佐子さんと結婚し、アキラが生まれ、やっと「家族」という幸せを手にする。しかしつかの間、事故でアキラを庇った美佐子さんを亡くしてしまうのだ。そして様々な困難を乗り越えながら男手ひとつでアキラを育て、生きていく。

読む人の年やその状況によって、それぞれに違ったものを感じる作品なのではないだろうか。作品中には、梓みちよの『こんにちは赤ちゃん』やビートルズの『アンド・アイ・ラブ・ハー』といったその当時流行った曲や映画、女優の名前なども出てきて作品の時代のイメージを作っている。その時代を知る人は懐かしく感じるのだろうし、知らない私たちの世代の読者は時代の雰囲気想像しながら読んでいく。また、私たち大学生であれば、子どもの頃のアキラの心情や、家をはなれ、東京に出ていくときのアキラの心情に、おのずと共感してしまうものがある。そして、ヤスさんの気持ちと、自分の親の気持ちを重ねて想像する。アキラが東京へ発つ前の晩、ヤスさんがカレーを作る場面がある。カレーは、何度も何度もつくってきたごく普通の夕食で、だからこそ、アキラにとって特別なのだ。アキラはだまってカレーを食べながら、寂しさや、不安や、いろんなものと一緒に、カレーを飲み込んでいたのだろうと思う。きっといつか自分が親になったときに読めば、ヤスさんがどのような気持ちでカレーをつくったのか、手に取るように感じる事が出来るようになるのだろう。

また、作品中には読んでいてはっとさせられるような言葉がちりばめられている。

「人生には、どうしようもないすれ違いや、食い違いや、一歩遅れのことや、先走ってしまうことがある。ひとが生きるとはそういうことなのだ——もしかしたら、海雲和尚はアキラが見舞いに来ないことを分かっている、後悔の苦みを教えたかったのかもしれない。」この言葉は、ヤスさんが父親のように、アキラは祖父のように慕っていた海雲和尚の死後、まだ意識のあるうちに見舞いに行けなかったことをアキラが悔やむ姿を見て、ヤスさんが感じたこととして書かれている。この言葉は、作品中で、この場面にかかっているからだけではなく、「後悔」とは私たちが生きていく中で必ず何度も繰り返し感じることであるからこそ、はっとするのだと思う。そして、この海雲和尚の言葉によって、読む人のどんな後悔も、浄化されていくような気がするのである。

「それでも、父を恨むことは全くなかった。……僕に恨みを抱かせなかった父を誇りに思う。父は嘘をついていた。僕は二十歳になって、事実を知った。だが、本当にたいせつな真実というものは、父と過ごしてきた日々にあったのかもしれない。」アキラが母親の死について知る場面がある。本当は、母親の美佐子さんは、アキラの身代わりとなって死んでいった。しかしヤスさんは、アキラに事故の真相を聞かれた時、自分の身代わりになって美佐子さんは死んでいったのだ、と嘘をつく。アキラが事実を知るのは、アキラが成人を迎えた時、海雲和尚がアキラに遺言として残した手紙によってであった。アキラにとっては、母の死について嘘をつかれていたということよりも、母が居なくとも父に愛され、ここまで育てられてきたということこそが、重大な真実だ、というのだ。父親に対して恨みを持たなかったのは、アキラがそれだけ、ヤスさんや周りの人々の愛情を受け、まっすぐに育った、ということなのだろう。

そして、本当に人を想った「嘘」は単なる偽りではない、それは「愛」の表れであり親子の絆を本当に確かなものにする事さえあるのだ、ということをお私たちに教えてくれる。

誰にだって、親がいる。作品中にも、ヤスさんとアキラの周りに多くの親子の姿が描かれている。一緒に住んでいたたり、そうでなかったり、生みの親と育ての親が違ったりもする。それでも、親子は、親子なのである。それぞれに、複雑な思いを抱えながら、皆、生きているのだ。また子どもも、子どもではなく「大人」と呼ばれる年になり、さらに、「親」となっても、生みの親はもちろん、周りの多くの人々に支えられて、一人前に育っていくのだということ、そして、世代を超えて繰り返される、人と人のつながりの間に存在している愛に、もう一度気付かせてくれる作品である。

人の温かさに触れたいくなった時、是非、読んでみて欲しい。

重松清著『とんび』（角川書店 2008年）